

天台智顗の性戒説について

藤 尾 和 世

問題の所在

大乘仏教においては厳密には部派教団におけるような精緻な律藏の編纂はみられない。つまり一般に大乘菩薩戒といわれているものは大乘諸経論の所説またはその抄出であり律藏として独立的な体系を持つものではない。そのためその内容も経・論の趣旨に基づくものであり複雑多岐にわたる。ところで大乘の教理に代表される般若空觀と部派の律儀とは根本的に矛盾するものであへが、中国仏教界は出家者の規範として部派の律藏をそのまま踏襲するのである。

天台智顗は『次第禪門』から『摩訶止観』に至る実践論を通して、正修行つまり本格的な禪あるいは止観の実習の準備段階としての二十五方便を組織し、その第一を「持戒清浄」として、一貫してこの大乘の教理と実践上の戒律における相反する問題に取り組み、戒学の体系化を図っている。また周知のとおり初期から晩年の智顗の講説においては思想的展開

がみられるのであるが、『次第禪門』『小止観』の「持戒清浄」には性戒に関する言及はみられない。拙論では智顗の晩年期の特徴とも考えられる性戒説について、『摩訶止観』『金光明經文句』を中心に考察することにする、

一 『摩訶止観』に定義される性戒説について

智顗は『摩訶止観』『持戒清浄』第一列名段において、『大智度論』『初品中戸羅波羅蜜義』⁽²⁾「訶摩衍品」⁽³⁾に説かれる菩薩行としての戸羅波羅蜜を十善道とする説を根拠に性戒を定義している。

まず戒相については身三（不脳害・不劫盜・不邪淫）口四（不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語）に不飲酒を加える八種としてゐる。不飲酒は「浄命にして意地を除く」というように、意業に関するものと考えているものであるから、性戒が身・口・意の三業の悪を防止する十善道に匹敵するものといえる。

次にこの性戒は「仏世に出でざれども世に常に之有り。故に旧戒と名づく。」とあるように、仏陀の出現を俟たないのであるから旧戒とし、三帰・五戒や具足戒である二百五十戒のような仏陀によって制定される律儀を客戒として区別する。

ここで智顗は客戒の人を具体的に阿毘達磨や律藏などが採用する十種得戒の人としている。これらの十種得戒の人は必ず仏陀からの何らかの受戒の契機によって戒体を発得するのであるが、此れに対して性戒は「受と不受と問うこと莫れ。犯せば即ち罪なり。受と不受と持ては是れ善なり。」というように、受戒の有無を問うものでなく、本来的に人が具えている戒であって戒体発得の契機を問題にしないのである。つまり智顗は性戒とは性として人に本有する戒であると把握していると考えられる。

さらに滅罪法については「無作に違う罪同じく滅するのみ。命を償うも猶お在り。故に知りぬ、受得の戒と性戒と異なり有り。」とし、受戒を契機に戒体を発得する無作戒（「客戒」）を犯した場合は懺悔し滅罪を得ることができのに対して、性戒の罪つまり性罪については滅罪法はないとする。また「若し性戒清浄なるは是れ戒度の根本・解脱の初因なり。此の性戒に因って無作受得の戒有るを得。」とあるように、性戒を仏陀による遮戒の根本とし性戒の重要性を強調するのである。このように根源的な戒として性戒を定義するこ

とによって、行者に性罪を犯す重大性を示し惡業に対する自覚を要請するのである。

そこで次に、智顗晩年期の講説とされている『金光明經文句』における五戒説を検証することによって、智顗の性罪との取り組みをさらに考察することにする。

二 『金光明經文句』にみられる五戒説

『金光明經』は「懺悔品」において極重諸惡の滅罪法を懺悔偈をもつて説く經典であり、天台ではこの懺法に注目して『国清百録』に「金光明懺法」を収めている。このことから智顗の『金光明經』に対する関心の深さを伺うことができる。おそらく智顗はこの經が極重諸惡の滅罪法を説くことを強く意識し、随文釈である『金光明經文句』において五戒説を立てていると思われる。

『金光明經文句』では『金光明經』序品の「諸根不具 壽命損減 貧窮困苦 諸天捨離 親厚鬪訟 王法所加 各各忿諍 財物損耗」の偈頌を所破の惡とし、具体的には五戒を犯した報であると解釈している。⁴⁾

まず五戒について「又十善に対す。殺盜姪は是れ身三、妄語は口四を撰し、飲酒は意三を撰す。：是れ五戒を開きて十善を出だすと為す。十善は是れ旧法輪王の所用なり。亦た性罪・性善と名づく。都て是れ一切罪の根本なり。」というよ

うに、身・口・意の三業における惡を防止する十善道に対応させ、旧法輪王の所有つまり旧戒とし、さらに性罪性善に関わるものとしている。このように五戒を十善道に対応させることは前述の『摩訶止観』で定義されている性戒説と一致するものであり、五戒を性戒として把握している。

さらに五戒一々について事・理の持戒を明かし、人・天・二乗・別教の菩薩・円教の菩薩のそれぞれの持戒の相と果報を規定してゆくのであるが、特に注目すべき点は、四明知礼が「得意犯」と注釈する円教の菩薩の究竟持戒に関する部分である。例えば不殺戒についてみれば「円教の人何ぞ但だ之を持つのみや。是の戒は唯殺唯慈にして、亦た事殺を作し亦た理殺を作す。」というように、円教の菩薩の戒行としては単なる持戒に留まることなく「唯殺唯慈」の殺生を行じることとを示している。そして事殺として『涅槃經』『梵行品』に説かれる正法護持のために誹謗大乘の婆羅門を殺した仙預国王の行為を挙げ、理殺（『法門殺』）としては、鴛掘魔羅が積極的に殺生を行じることとを指している。つまり衆生の命を断つことは一切の煩惱を浄化することであり、極悪非道の鴛掘魔羅は法身をもって衆生を教化済度するのだという。

以上のように『金光明經文句』においては円教の理からすれば非道をも戒行となるという非常に急進的な戒律思想を表明するのであるが、これは『摩訶止観』に組織される四種三

昧のうちの随自意三昧で止観の対境を惡とする部分の「唯だ円法を善と為す。善く実相に順ずるを名づけて道と為し、実相に背くを非道と名づく。若し諸惡は惡に非ず皆な是れ実相なりと達すれば、即ち非道を行じ仏道に通達する。」⁽⁶⁾という主張に一致する。また智顗はこの五戒説の最後に「五戒の実相を觀すれば覺智清浄なり。」と結論し、五戒を単なる在家者に対する戒とする従来の概念を超越し、相即不二の円融実相の理を敷延したより深遠な大乘戒として把握するのである。

おわりに

実践論である『摩訶止観』では實際の修行上の問題として性戒を定義し行者に惡業に対する自覺を要請し、『金光明經文句』では十界互具の教理上の側面から普遍的五戒説を主張するのである。つまり戒学体系全般からみては極めて基本的かつ倫理的な五戒十善を性戒として捉え、教理と実践の両側面から展開したことは大乘仏教における戒律の課題に対してひとつの解決を示していると考えられる。

- | | | | |
|---|-------------|---|--------------|
| 1 | 大正四六・三六a—b | 2 | 大正二五・一五三b |
| 3 | 大正二五・三九五b—c | 4 | 大正三九・五〇b—五二c |
| 5 | 大正三九・九六b | 6 | 大正四六・一七b—c |

〈キーワード〉 摩訶止観、金光明經文句、性戒、五戒、十善

（大谷大学大学院）